

産業遺産紹介 IH-CSIH-075

旧尼崎紡績本社事務所

所在地：兵庫県尼崎市東本町1-50

旧尼崎紡績本社事務所（前ユニチカ記念館）は、尼崎が工業都市として発展する契機となった尼崎紡績の本社事務所として、1900（明治33年）に竣工した煉瓦造2階建ての建物で、尼崎に現存する最古の洋風建築物である。後に、本社が大阪に移されてからは尼崎工場の事務所となった。尼崎紡績に関して尼崎に残る唯一の歴史遺産で、工業都市尼崎の歴史を象徴する建物である。

1959年、大日本紡績（株）は、創業70周年を記念事業として、尼崎工場の事務所を日紡記念館（後にユニチカ記念館）を開設、企業の発展過程を示す資料を展示していた。記念館は、建物の老朽化で2019年に閉鎖された。

2023（令和5）年3月、尼崎市が旧事務所を取得、市民共有の歴史遺産として 保存・活用されることとなっている。



〔写真1〕旧尼崎紡績本社事務所 （2024/06/07 筆者撮影）



〔写真2〕建物の西側側面 （2024/06/07 筆者撮影）

建物の設計者や施工者は不明であるが、デザインから見て日本人の設計と考えられている。建物の特徴として、外壁はイギリス積み煉瓦造りで、基礎部分7段は黒煉瓦である。煉瓦の平部分にはメーカー刻印があり、泉州地方で製造された煉瓦が使用されている。部屋の区切り、暖炉、階段等については、竣工当初から変わっていない。また、屋根は寄棟で4本の煙突があり、屋根全体を囲むようにパラペットが立ち上がっている。なお、明治期に建てられた古い煉瓦造であるため、耐震性が低く、保存・活用を図っていく上での課題となっている。

（文・写真：石田正治）

中部産遺研会報 第98号 目次

1. 産業遺産紹介／石田正治	1
2. 人造石の産業遺産を歩く（22）神野新田干拓堤防と牟呂用水の人造石遺産／天野武弘	2
3. ラオスの産業と産業遺産をめぐる（1）ラオス南部の現役ホフマン窯見学記／天野武弘	10
4. 第186回定例研究会の概要／田口憲一	12
5. 第187回定例研究会の概要／夏目勝之	14
6. 第33回総会、第188回定例研究会の案内／夏目勝之	16
7. 研究会費振込依頼、編集後記、原稿募集	16

人造石の産業遺産を歩く(22)：服部長七の人造石工法(長七たたき) ー全国に点在する人造石遺産ー

神野新田干拓堤防と牟呂用水の人造石遺産

Artificial Stones by Hattori Choshichi and Method of Construction:

(22) Artificial Stone Structures as Industrial Heritage, Jinno Shinden Reclamation Levee and Muro Irrigation Canal

天野武弘／AMANO, Takehiro

Key Words ; Artificial Stones, Choshichi-Tataki, Hattori Choshichi, Industrial Heritage, Uruga Dock

1. はじめに

稲作中心の日本の農業では、その収穫量を増やすために沿岸の寄州や浅瀬を干拓した新田開発が江戸時代より広く行われてきた。愛知県の東三河地域も例外ではなく、特に明治期には渥美郡の牟呂村、磯部村、大崎村（現豊橋市）の海岸沖で巨大面積の新田開発が進められた。それが今回紹介する神野新田である。新田には用水が不可欠で、そのために牟呂用水が開削された。どちらも最終的には名古屋の豪商神野金之助（当時は「じんの」、後に「かみの」と改称）の出資により、服部長七の人造石工法で完成に導かれたことが知られている。

ところが開拓から 120 年余り経つ現在、新田域内に暮らす人々でも歴史的偉業を知らない人が増えている。新田内には今も広大な水田、畑、農業ハウス、養魚場などが見られるが、住宅、商業施設のほか企業、スポーツ施設、ホテルなども進出している。隣接する埋立地にはトヨタ自動車田原工場など巨大企業が多数進出した臨海工業地帯として、また三河港（豊橋港）として整備されてきた影響もある。

しかしこの地を築いた開拓当時の先人の苦労や歴史を振り返る必要もある。新田特有の見事に区割りされた田畑には、牟呂用水からの水の供給も連綿と続いている。部分的ではあるが開発成功の鍵となった人造石工法の遺産もある。今回は巨大新田を創成した先人の偉業とその遺産を紹介する。

2. 前身となる毛利新田干拓と賀茂用水開削

当時およそ 1,100 町歩（約 1,100 ヘクタール、以下 ha と略）の大規模新田であった神野新田は、いきなり開発されたわけではない。東三河の母なる河川・豊川の河口付近では江戸時代より新田開発が進められ、1888（明治 15）年には 70 カ所ほどの新田があったとされる。牟呂村の沖でも 1879（明治 12）年に明治新田の築立願いが愛知県令に出され、翌年に約 104 町歩の開発に成功する。後にここは神野新

田に囲まれて安定した新田となり、今も多くの耕地が広がる姿を残している。

開発当時の明治新田前の海面には、まだ広大な寄州が広がっていた。愛知県土木課の岩本賞寿（後に土木課長心得）がここを干拓の適地と判断して、同郷の山口県出身の勝間田稔愛知県令（後に知事）に進言。勝間田は帰郷した際に旧山口藩老で第十国立銀行（現山口銀行の前身）の頭



図1 神野新田と牟呂用水の位置
(国土地理院地図に加筆)

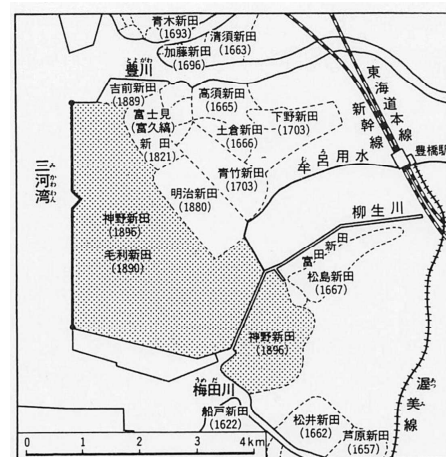


図2 豊川河口付近の新田開発
(出典：『むろ』1987年版)

取をしていた毛利祥久に干拓事業を勧めた。現地視察した毛利は意を決し、愛知県の援助を得て 1887（明治 20）年 11 月に海面築立願いと目論見書（工事計画書）を提出する。

毛利新田の干拓工事は、まずは用水路の開削から始まった。これには前段があった。1884（明治 17）年の大干ばつの被害から、豊川中流左岸の八名郡八名井村（現新城市八名井）、同郡金沢村（現豊川市

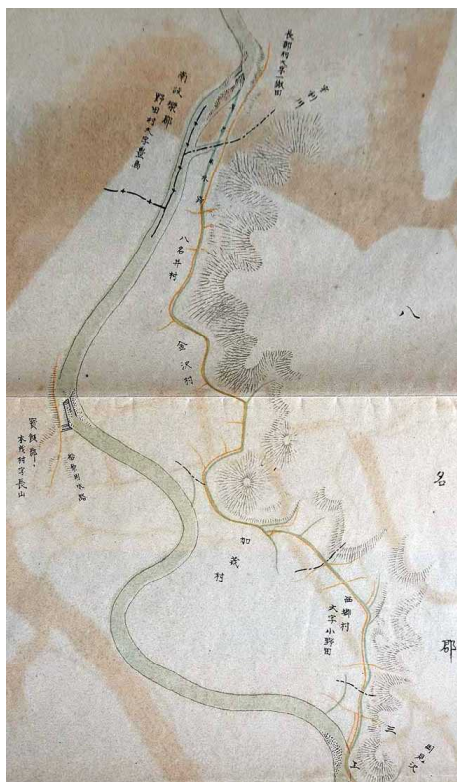


図3 旧賀茂用水を利用した牟呂用水上流部の金沢村、賀茂村ほか(出典:『神野新田紀事』の「牟呂用水全図」より部分)

その後、毛利新田や神野新田でも利用された八名郡長部村一鉄田(現新城市一鉄田)の豊川左岸であった。

ところが完成2ヵ月後の同年9月、暴風雨で取水堰や樋管等が決壊する。この時、賀茂用水の修理の願いに合わせて用水路幅員を拡幅し、毛利新田まで延長した牟呂用水と名付けられる用水路開削計画を作成する。同年11月に毛利祥久より出願されて認可となり、翌1888(明治21)年6月に開削を完了する。こうした流れはまさに県土木課の岩本賞寿の筋書き通りでもあった。

毛利新田干拓事業の方は、用水路完成前の1888(明治21)年4月に起工され、翌1889年7月に滞留(堤

金沢町)、同郡賀茂村(現豊橋市賀茂町)から農業用水路開削の要望が強く出されていた。

県土木の岩本賞寿は、これを機に、明治新田沖の新たな新田開発に伴う用水確保を視野に入れた賀茂用水の開削計画を地元とともに進め、1887(明治20)

年7月に完成させる。水源取水口は、そ

の後、毛利新田や神野新田でも利用された八名郡長部村一鉄田(現新城市一鉄田)の豊川左岸であった。

ところが完成2ヵ月後の同年9月、暴風雨で取水堰や樋管等が決壊する。この時、賀茂用水の修理の願いに合わせて用水路幅員を拡幅し、毛利新田まで延長した牟呂用水と名付けられる用水路開削計画を作成する。同年11月に毛利祥久より出願されて認可となり、翌1888(明治21)年6月に開削を完了する。こうした流れはまさに県土木課の岩本賞寿の筋書き通りでもあった。

毛利新田干拓事業の方は、用水路完成前の1888(明治21)年4月に起工され、翌1889年7月に滞留(堤

防閉め切り)工事が完了する。しかし同年9月の暴風雨で堤防が決壊。修復を経て翌1890(明治23)

年5月に完

工し、総面積1,050haの毛利新田が完成する。ところが翌1891(明治24)年10月の濃尾地震で地盤沈下を伴う大被害に遭う。これも修復して乗り切ったかに見えたが、1892(明治25)年9月の暴風雨と高潮によって原形を留めないほどの壊滅的被害を被ってしまう。こうした度重なる苦難もあって、ついに毛利祥久は干拓計画を断念することになる。



写真1 毛利新田堤防工事(1887年)
(出典:神野新田資料館の展示パネル)

3. 神野新田干拓工事の開始

一神野金之助と服部長七との出会い一

手を差し伸べたのが神野金之助で、毛利祥久との売買契約を完了したのは、壊滅的被害から約半年後の1893(明治26)年4月であった。それを後押ししたのが服部長七の人造石工法であった。

神野金之助(尾張国海西郡江西村出身、現愛知県愛西市)は当時、金融や金禄公債の売買等で資産を増やし、大地主として土地経営にも関心を持つ人物として知られていた。1884(明治17)年には現額田郡幸田町の菱池新田(53町歩)干拓に成功した実績もあった。

神野金之助と服部長七との関わりは、1889(明治22)年に人造石工法で完工した広島県の宇品新田及び築港工事のときであった。ここは長七の人造石工法を世間に知らしめた工事であったが、一方で広島県の予算超過もあって長七には県の官有地が代金の一部として支払われた。長七としても工事費の現金支払いに窮し、かねてより後ろ盾となっていた子爵品川弥二郎(後の内務大臣)に訴える。品川は菱池新田干拓を成し



写真2 神野金之助
(出典:『神野新田』)



写真3 服部長七肖像
(出典:岩津天満宮蔵)

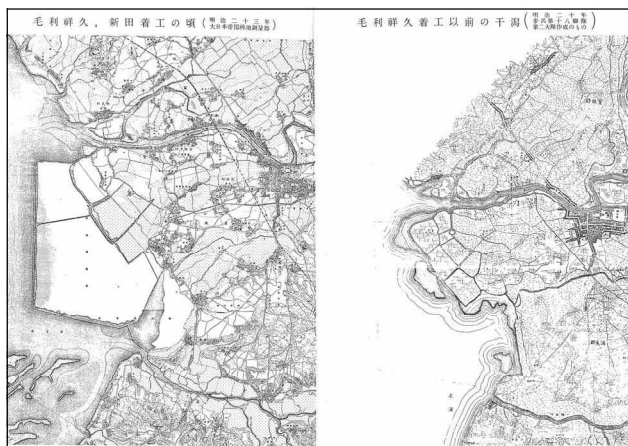


図4 毛利新田の着工の頃(1889年)と着工前(1887年)
(出典:『神野新田』)

た神野金之助に支援要請する。その結果長七所有となった官有地を担保に資金援助という経緯があった。

こうした因縁から人造石工法を知った神野金之助は、服部長七を伴って現地検分して毛利祥久と売買契約を行ったが、その際、人造石工法採用を決し、1893（明治26）年6月に工事を開始する。

4. 神野新田干拓堤防と樋門を人造石で完工

（1）全長12km余の人造石干拓堤防工事

神野新田工事では、工事に関わる幾つかのエピソードが伝わっている。

その一つが干拓範囲のことで、当初、2案の対立が際立っていた。1案の甲説は旧毛利新田の縮小計画、2案の乙説は旧毛利新田の面積を維持する計画であった。県庁や郡庁、地元の大勢は縮小案を支持した。また人造石工法による築堤の反対もあった。

理由は、11月頃から春先5月にかけて北西の強風が吹き荒れることが大きかった（当時の風力で3～4、秒速3.4～7.9m、三河の空っ風とも呼ばれた）。特に西側に面した長さ2,100間（約3,820m）の4号堤と呼ばれる堤防はもろに西風を受けるため、暴風雨や高潮による破堤が起こりやすいことであった。また冬場の工事では作業船は寄りつけず、築堤作業は困難との意見が大勢を占めていた。そのため縮小案では、北側の5号堤を放棄し南側の3号堤を短縮して陸側に近いところに4号堤を築くという、西風の影響を低め作業性を重視していた。

しかし神野金之助は1案を支持した。懸念は2案では300町歩（約300ha）の大新田を失うことであった。そのため西風対策として宇品新田で成功した人造石工法を採用し、さらに暴風雨や高潮対策として旧毛利新田より堤防を嵩上げして築堤する案を示した。人造石は堅牢でないとする反対論には、再度服部長七を伴って宇品港ほか、こちらも人造石工法で成功した四国松山の三津港などを視察して、その有効性を確信して退けた。

結果として毛利新田の旧堤防を活かす形で築堤し直し、堤防の海面側を人造石工法で施工。堤防高さを毛利新田時代の1丈8尺（約5.5m）から6尺（約1.8m）高くした2丈4尺（約7.3m、数年後にさらに3尺嵩上げして2丈7尺、約8.2m）として干拓堤防を完成させた。この際、波浪対策として堤防法面上部の傾斜角を5分（約63度）と急角度にした波返しを造っている。こうした形態は人造石工法だからこそ出来た施工でもあった。波返しによって大量の海水を新田内に流入させる度合いを少なくし、破堤を防ぐことに役立った。

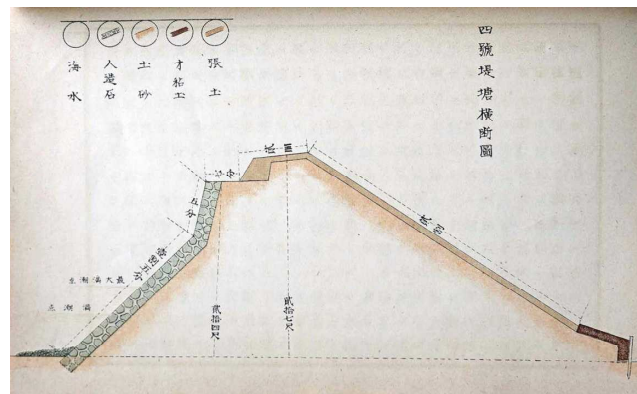


図5 神野新田4号堤防の断面図(出典:『神野新田紀事』)

新田干拓で特に重要となるのが新田側と海面とを締め切る滞止めである。これは短時間に行う必要がある。神野新田では、三ヵ所の滞止めを工事開始3ヵ月後の1893（明治26）年9月16日と17日の二日連続で行った。初日の早朝に25間（約45m）の滞止めを成功させ、二日目には60間（約109m）と25間の2ヵ所の滞止めを行ったが、この時の様子は、服部長七の陣頭指揮の下、数千人の作業者が滞留箇所（うら）の両側に紅白に分かれて競争作業したことが『神野新田紀事』に克明に書かれている。警官も配置したこの滞留工事はその後も語りぐさとなった。

こうした神野新田工事では、1日数百人から多いときには数千人の地元民が作業に当たっていた。堤防や埋立地には大量の土砂や石材等を必要とする。土砂は近くの官有の寄州や近接する渥美郡浦村（現田原市浦町）から採取。石材は5～6里（約20～24km、対岸の現西尾市東幡豆町は今も幡豆石の産地）、種土は3里以内（約12km、三河は真砂土の産地）、石灰も2里以内（約8km、豊橋と田原は江戸時代からの石灰産地）で調達できる好地であった。海上には幾千の船舶が回漕し、幡豆石運搬では一日5銭くらいの賃金だったとも伝わる。

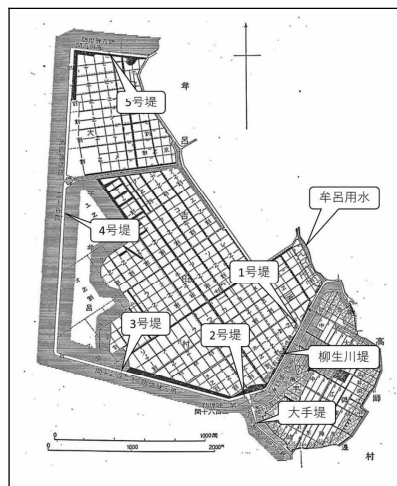


図6 神野新田の干拓堤防
(出典:『神野金之助重行』に加筆)

堤防工事はこのほか順調に進み、1895（明治28）年に人造石工法で完成した堤防は、1号堤から5号堤の計4,945間（約8,990m）と南側の二回地（にかいち）の大手堤防と柳生川堤防を合わせ、総延長6,729間（約12,233m）の大堤防となった。干拓面積はおよそ

1,100 町歩 (1,100ha) で、従前の毛利新田とほぼ同じであった。違いは、堤防の海側法面を波返しを含め人造石工法で造ったことと、堤防を大きく嵩上げたことであった。これが後々まで功を奏し、以後 1953 (昭和 28) 年 9 月の台風災害までの約 60 年近く、大きな災害に見舞われることがなかった。

(2) 神野新田の人造石樋門工事

新田には樋門 (樋管) が不可欠の施設である。これはこれまでの連載の中でも度々述べたように、主目的は通水であり悪水排除 (排水) である。

神野新田では、堤防の総延長が長大な 12.2km 余りになるため必然的に数も多くなる。後の設置を含め合計 8 つの樋門 (神野新田では樋門と呼称) が堤防を削り貫く形で造られた。加えてここでは通船の利用目的もあったことから比較的大きな樋門 (複数の樋管を持つ) となった。そしてもう一つ特筆できるのが、いずれの樋門も人造石工法によって建設されたことである。

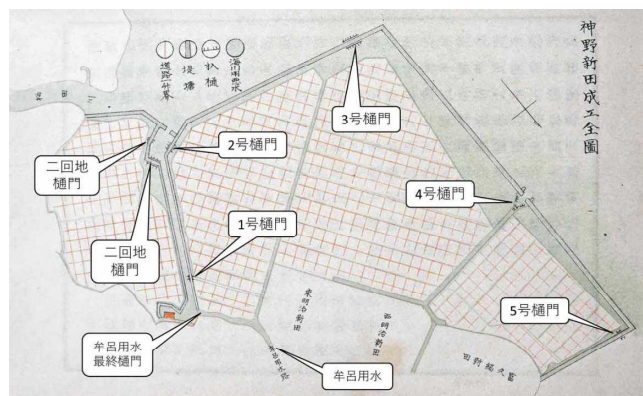


図7 神野新田の樋門位置 (出典:『神野新田紀事』に加筆)

『神野新田紀事』によれば、木製樋門は 3 年で部品取り替えなどの修築が必要となり、7 年以内に総伏せ替えを要すると述べ、手間と費用を考えれば人造石が相応しいこと記している。当時はまだ木製樋門が圧倒的に多い時代であったが、先見の明ともいえる判断であった。

後年、愛知県ではこうした問題に目を向け、人造石樋管の有効性を認め、1897 (明治 30) 年に木製樋門から人造石樋門への伏せ替えに県費 6 割補助を決める。神野新田での長七の人造石樋門はそれを後押しする工事ともなった。

樋門工事は堤防の人造石工事と同時に開始された。規模の大きい 3 号樋門は 1894 (明治 27) 年 3 月に竣工、同じく大きな 4 号樋門は堤防が全て完成した 1895 (明治 28) 年 3 月に竣工する。そしてこの時までに 5 門全ての樋門が完工する。樋門は船通しを

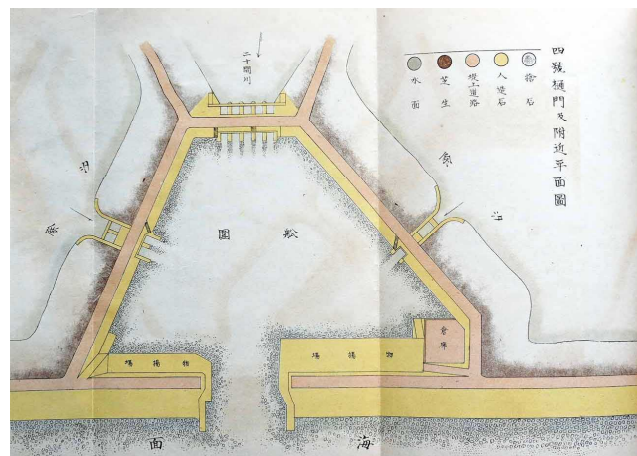


図8 神野新田の4号樋門 (三カ所の樋門と4号堤内側の物揚場を含め全て人造石 (黄色表示) の様子が分かる、左側の樋門は現在は5号樋門) (出典:『神野新田紀事』)

兼ねるものが多く、幅は 9 尺 (約 2.7m) から 6 尺 5 寸 (約 2.0m) と比較的広く造られた。特に 3 号と 4 号樋門では船通しがともに 5 門取り付く大きなものとなった。堤防完成 4 年後の 1899 (明治 32) 年には、5 号堤

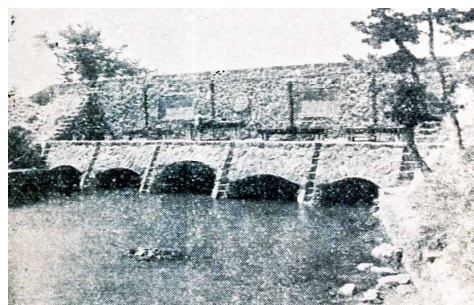


写真4 完成当時の神野新田4号樋門 (人造石で施工) (出典:『神野新田』)



に肥料運搬を目的とした樋門が新設される (現在は閉鎖)。当初建設された 5 つの樋門はその後コンクリートで改修されたが、現在も同位置に存在する。

(3) 観音像の寄進、堤防の保全

人造石の大堤防が完成した 3 ヶ月後の 1895 (明治 28) 年 6 月に、西風を最も強く受ける 4 号堤と 3 号堤に観音像が安置された。合わせて延長 3,330 間 (約 6,054 m) となるが、ちょうどこの長さに合わせるように、3 号堤の東側に安置した大日如来の石造を起点に、100 間 (約 180m) ごとに西国 33 霊場の分身となる観音像 33 体の石造が安置された。真宗の信仰心篤い神野金之助は、その目的を新田入植

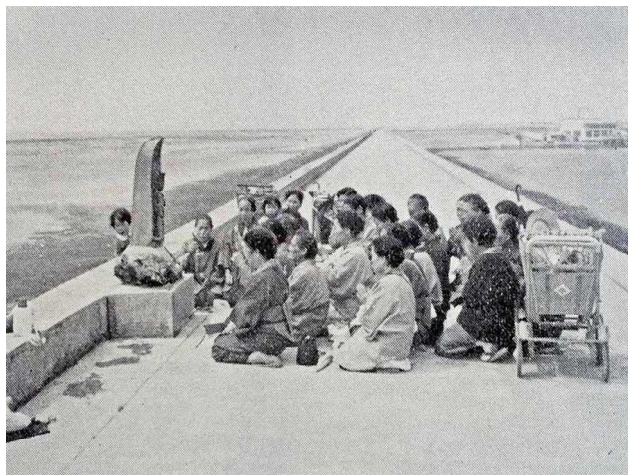


写真6 観音像の巡拝(出典:『神野三郎伝』)



写真7 服部長七寄進の観音像

(2018.6.20筆者撮影) 者の心の平安と堤防の保全に置いた。すなわち、西国 33 ヲ所巡礼を擬似的に体験し徳を積むことと、定期的に巡拝することで堤防の破損箇所を早期に発見できることに置いていた。

観音像は有志の寄付で建立されたが、神野金之助の父の神野金平(観音像の番号、第 8 番)や甥の神野三郎(第 23 番、新田経営の中心的役割を担う)ほか、服部長七(第 30 番)や人造石工事を担当した服部工場と刻まれる支配人の山本晋平(第 16 番)や職長の角八三郎(第 17 番)の寄進もある。

人造石で造られた堤防や樋門は、神野金之助や服部長七の思惑通りに、その強固さを証明したが、これには観音像の巡拝もさることながら、普段の手当があったからであろう。いわゆる目塗りである。

人造石工法では、たたきの練土と割石が主要材料となって構成されるが、割石と割石の隙間となる目

写真8 堤防人造石の目塗り
(出典:神野新田資料館展示パネル)

地の練土の劣化が命取りになることがある。これを防ぐために目地の表面をセメントで補っている。これを目塗りというが、神野新田の人造石堤防や樋門では定期的に大体 3 年ごとに目塗りをしていたといわれる。こうした地道な努力が神野新田を長く災害から守った要因でもあった。

1896(明治 29)年 4 月に神野新田の成工式及び紀徳碑建設式が、入植者の心の支えとなるよう神野金之助により創建された神富神社(1895(明治 28)年設置、現牟呂神富神明社)の前で執り行われた。農商務大臣榎本武揚はじめ子爵品川弥二郎ほか県知事(代理)、郡長など二千人の参列があった。今も変わらずに建つ紀徳碑の撰文は人造石工法の理解者でもあった品川弥二郎である。紀徳碑には神野金之助とともに服部長七の名と人造石で築造されたことがしっかりと刻まれている。



写真9 牟呂用水最終放水樋管とその脇に建つ紀徳碑(樋管と護岸は人造石で施工)(出典:牟呂用水土地改良区蔵)

5. 牟呂用水の 7 ヲ所の人造石樋管工事

神野新田への用水工事も 1893(明治 26)年 4 月に毛利より事業の全てを受け継いだ段階で、神野金之助によって工事が再開された。その矢先の同年 8 月の洪水によって水源の取水堰や元杓樋管、水路などが大破してしまう。この時の修復では旧賀茂用水側との確執もあったが、県土木課元課長の黒川治愿の仲介によって解決し、翌 1894(明治 27)年 3 月に改築工事に着手する。

工事では、従前より豊川に設置されていた横断堰堤を、長さ 180 余間(約 327m 余)、幅平均 20 余間(約 36m 余)に拡張修復する(舟運や筏流送に配慮した舟通しも設置)。同時に、取水口の第 1 号樋管(牟呂用水では樋管と呼称)を服部長七の人造石工法で工事したのははじめ、上流部の旧賀茂用水の水路上

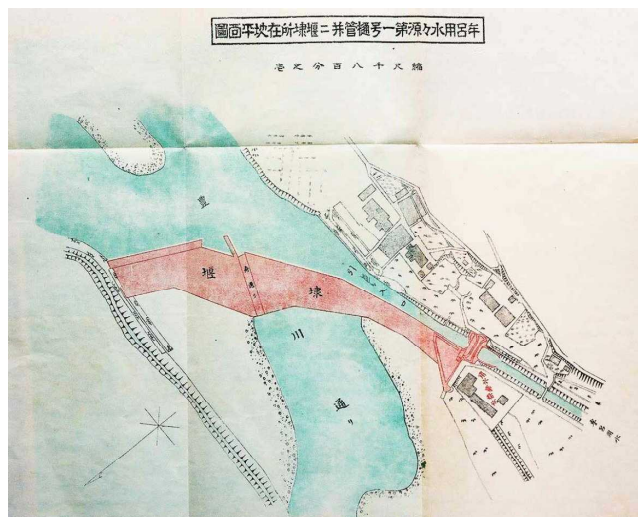


図9 牟呂用水水源堰堤と第1号樋管の平面図
(出典:『牟呂用水普通水利組合誌』)



図11 牟呂用水上流部(旧賀茂用水受益区域)の平面図
(2号、3号樋管は宇利川自在運轉樋設置で撤去、6号、7号樋管は
間川と交差地点に設置、現在間川は別の流れに付け替え)
(出典:牟呂用水土地改良区蔵に加筆)

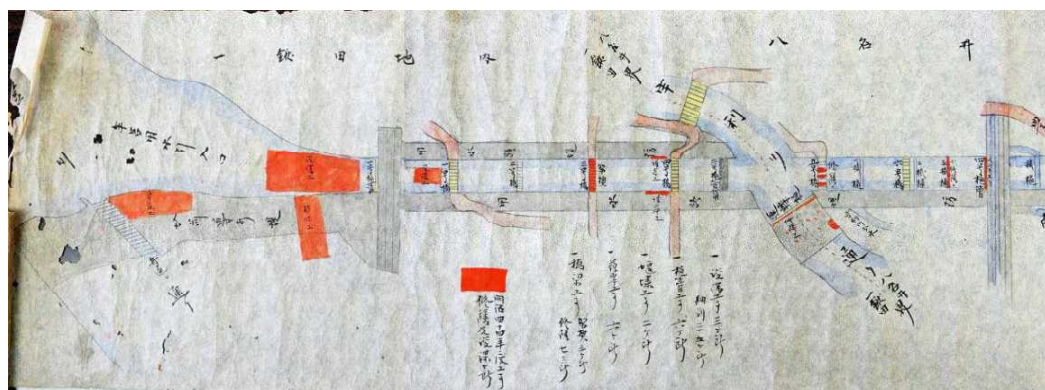


図10 1911(明治44)年当時の牟呂用水堰堤、第1樋管、宇利川自在運轉樋付近の絵図
(修繕箇所が朱色で示される、浚渫工事3ヶ所、樋管工事6ヶ所、堰堤工事2ヶ所、護岸工事6ヶ所、橋梁
工事10ヶ所が記載)(出典:牟呂用水土地改良区蔵の絵図より部分)

に造られた第2～第7の樋管工事を、同年1894(明治27)12月に完工する。同時に、神野新田までの下流川の開削工事を含め、延長6里(現在の延長約23km)といわれた牟呂用水の完成となった。

しかし毎年のように起こる洪水被害で修繕を余儀なくされた。特に上流部の宇利川と交差する地点に当初設置された伏越樋は2回も流出したため、洗堰

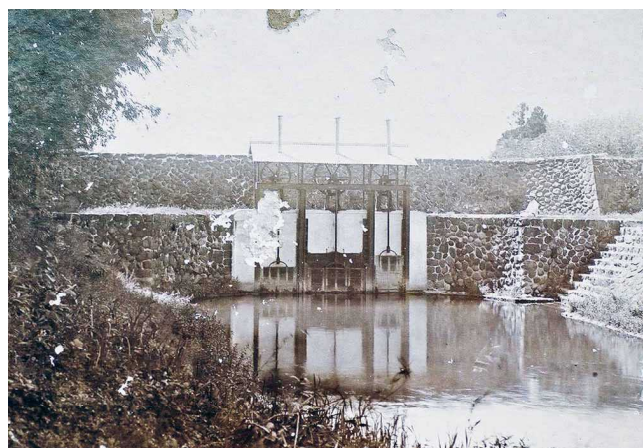


写真10 人造石造の牟呂用水第1樋管(上流側)
(出典:牟呂用水土地改良区蔵)



写真11 宇利川に掛けられた自在運轉樋
(左奥が牟呂用水の上流側、牟呂用水の流水を一旦宇利川に合流させ、右側にある牟呂用水の下流側水路に流し込む方式、護岸は人造石)(出典:牟呂用水土地改良区蔵)

造時と思われる姿で現存)。1913(大正2)年度に宇利川運転樋の基礎をコンクリートや鉄材等で改造(周辺の人造石護岸は当時のものと推測する姿で存在)。1915(大正5)年度に7号樋管(河川付け替え前の間川の下流に位置、現賀茂神社へ通じる橋に

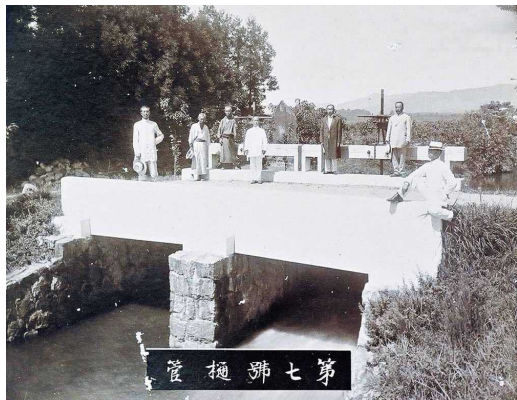


写真12 7号樋管(1915(大正5)年の改修後と思われる、基礎と護岸に人造石が残る)
(出典:牟呂用水土地改良区蔵)

利用)を石材コンクリートに改造する(人造石護岸の痕跡現存)。第1樋門も1912(大正元)年度に戸前付近の基

礎をコンクリート等に改造している。

その後、牟呂用水の水源施設となる堰堤は1967(昭和42)年に、豊川右岸の松原用水と号口化され、牟呂松原頭首工として現在に至っている。当初の堰堤は撤去され、第1号樋門も上流側はコンクリートで大きく改造されたが、下流側はほぼ当初の人造石の姿を残し、今もその役割を果たしている。

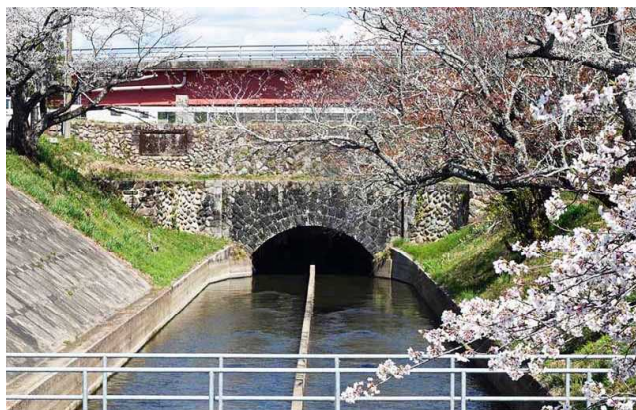


写真13 現在の牟呂用水第1樋管(人造石が残る下流側)
(2025.4.4筆者撮影)

6. 神野新田と牟呂用水の現状と人造石遺産

神野新田の現状は、冒頭でも述べたように住宅や商業施設などが増え、神野新田土地改良区によれば、新田内の受益地面積は464haと当初の約半分弱である。このうち水田が約70%、畑が約18%、養鰻池が約12%と、多くを水田が占めており、開発者神野金之助の思いが連綿と息づいている。牟呂用水からの水も分水工によって支川の水路が新田内に縦横に張り巡らされ、その総延長は32kmに及んでいる。

牟呂用水の方は、流路こそ変わっていないが幾つかな変化もある。目に付くのは、上流部では水路内の流れを3つの水路に分け、下流部では右岸側にボックスカルバートと呼ばれる暗渠水路を付設していることである。3つの水路に区分したのは、多くが山側に接する左岸側の1本を雨水など野水用の水路としたこと、右岸側の2本は施設チェックの際に交互に流せるようにしたことによる。野水は新田へは流さず、水路途中の河川に放流する。暗



写真14 人造石の牟呂用水第5樋管(3水路に区分け、左側が野水用、遠景は東名高速道路)
(2005.8.2筆者撮影、現状は今も不変)



写真15 下流部の牟呂用水に造られた牟呂発電所跡(1896(明治29)年建設、右岸側に暗渠水路が付設)(2025.4.4筆者撮影)

渠水路は畑用に通年通水のためである。水田への通水時期は4月から8月となっている。

なお上流部の賀茂町などへの通水では、今も4号、5号、6号、7号の各樋管から分水している。また宇利川自在運転樋は今も機能し、近年の改修もあったが護岸の人造石は変わらずにその姿を保っている。

現存する人造石の産業遺産については、1



写真16 宇利川自在運転樋の人造石護岸
(2025.4.4筆者撮影)

号樋管のほか5号樋管が1908(明治41)年度の改修時の姿を残している。7号樋管は近年改修され、それまであった橋脚部分の人造石が撤去されたが、護岸にほんの一部だが顔を覗かせている。

神野新田にある牟呂用水の最終樋管は、現在は柳生川河口となる海への放流側にコンクリートの流出



写真17 人造石の牟呂用水最終樋管(現在この前面にコンクリートの流出口が取り付け、現状景観は異なる、左側は紀徳碑の人造石擁壁と垣根)
(1985.3.6筆者撮影)

樋管上部は通路となっていて、海側にのみ小さな欄干が造られている。これも人造石である。

またこの最終樋管に隣接して紀徳碑が建っているが、この囲いとなる擁壁及び垣根の一部が人造石で出来ている。ここも建立当時と大きくは変わっていないようである。この最終樋管前の少し広がった水路の底はかつては人造石で施工されていた。改修時に重機で取り壊す際、固くて難儀をしたとの話が



写真18 旧神野三郎宅の人造石擁壁
(2025.4.4筆者撮影)

伝わる。
また紀徳碑に隣接して、かつて神野金之助の甥の神野三郎宅があった。その敷地境の一部に

長さ 20m ほどの人造石擁壁が残っている。

干拓堤防や樋門については、かつては人造石で造られていたが、現在は全てコンクリートで改修され、その景色を見ることができない。ただし堤防については改修時に、人造石の上をコンクリートで覆う工事をしたこと、今も内部には多くの人造石がその



写真19 神野新田干拓堤防の人造石法面をコンクリートで嵩上げ(1953(昭和28)年工事)
(出典:神野新田資料館展示パネル)

こうした現存する、あるいは隠れた人造石遺産は、神野金之助や服部長七の功績を記するろもに、新田

を糧として生活してきた入植者にとっても守り神的存在であった。その点ではこの地の歴史を記す文化財としての価値もあろう。早い指定あるいは登録も期待したいところである。



写真20 神野新田の4号堤防(人造石で建設当初の波返しの様子分かる、現在堤防は全てコンクリートで覆われる、隠れた人造石遺産の一つ、観音像は嵩上げ後に再安置)
(2025.4.5筆者撮影)

値もあろう。早い指定あるいは登録も期待したいところである。

牟呂用水は、約 450 年の歴史を持つ松原用水と合わせて、2017(平成 29)年に「松原用水・牟呂用水」の名で世界かんがい施設遺産に登録された。愛知県では入鹿池、明治用水に続く 3 例目である。

一方神野新田についても、わが国有数の巨大干拓地となる歴史を有しており、これまで述べた歴史的事実と意義を今一度広く共有する動きを強める必要がある。

<謝辞>

最後になったが、本調査では神野新田土地改良区及び牟呂用水土地改良区の皆様に大変お世話になった。心より御礼を申し上げます。

【文献】

- (1)神野金之助編『神野新田紀事』神野金之助、1904(明治 37)年 7 月。
- (2)神野三郎『神野新田誌』神野新田事務所、1912(大正元)年 10 月。
- (3)牟呂用水普通水利組合『牟呂用水普通水利組合誌』、同組合、1937(昭和 12)年 7 月。
- (4)堀田璋左右『神野金之助重行』神野金之助翁伝記編纂会、1940(昭和 15)年 2 月。
- (5)酒井正三郎、小出保治『神野新田』神野新田土地農業協同組合、1952(昭和 27)年 12 月。
- (6)豊橋市史編集委員会編『豊橋市史 第三巻』豊橋市、1983(昭和 58)年 3 月。
- (7)牟呂用水 100 周年記念誌編集委員会編『100 年の歩み』牟呂用水土地改良区、1988(昭和 63)年 3 月。
- (8)神野新田土地改良区編『神野新田開拓百年記念誌』同組合、1993(平成 5)年 4 月。

ラオスの産業と産業遺産をめぐる(1)

ラオス南部の現役ホフマン窯見学記

Report on a Visit to the Operating Hoffman Kiln in Southern Laos

天野武弘／AMANO, Takehiro

Key Words ; ラオス南部、ホフマン窯、煉瓦焼成窯、煉瓦工場

1. はじめに

筆者は 2013 年 9 月にラオス南部の都市パクセ近郊の工場にガラ紡機が導入されたとき、初めてラオスに訪れた。日本で見つけた古いガラ紡機を国内で整備して移出した経緯があるが、その際に技術協力した関係からであった。その後も技術協力の要請があつて何度もラオス南部に訪れる機会があり、今日まで都合 11 年余り 20 回ほど現地で稼働するガラ紡機の運転調整や整備などに関わってきた。こうした中で、パクセ市内及びその近郊の産業状況や産業遺産を概観する機会が度々あった。

今回この会報には、定例研究会で報告したラオス南部で稼働するホフマン窯（ホフマン式輪窯とも呼称）などの現状を、簡潔に報告をと考えていた。しかし編集者よりこの形のテンプレートで記載をとの要請があつた。少し悩んだが、これまでに訪れたものづくり現場や産業遺産を少しの間連載することとした。といつても見たまま、聞いたまま（通訳を通じて）の概観的内容になることをお許し頂きたい。

2. 現役ホフマン窯、発見の経緯

操業中のホフマン窯を発見したのは偶然であつた。2016 年 8 月に、訪問していたガラ紡工場で煉瓦が必要になり、従業員と一緒に出かけた先が煉瓦工場だった。先ずはこれに驚いたが、さらに驚いたのが、巨大な輪環式の窯を見たときであつた。もしかしてホフマン窯ではと目を疑った。後日知ることとなったタイやベトナム、中国では今も使われている実態を掴んでなかったとはいえ、稼働している窯の實際を目の当たりにして飛び上がったことを覚えている。日本では歴史的な煉瓦焼成窯として重要文化財にもなる窯だったからである。

筆者もだいぶ以前ではあるが、栃木県しもつけの旧下野煉瓦のホフマン窯（1971 年操業停止、1979 年国重文指定、1991 年筆者見学）や、舞鶴市かんざきの旧神崎煉瓦のホフマン窯（1953 年頃操業停止、1999 年国登録文化財、1990 年筆者見学）を見ていたことが幸いした。まさに思わぬ発見であつた。

居ても立ってもおられず、予定を変更して発見 3 日後に、事前の許可を得てこの煉瓦工場の調査に

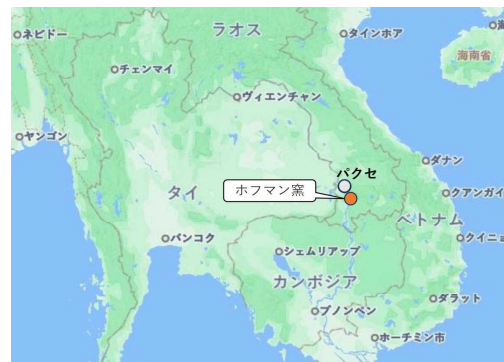


図1 ラオス南部の都市パクセ近郊の現役ホフマン窯所在地(「Yahoo!地図」に加筆)

伺った。この時、工場の責任者から操業の実状を聞き取りするとともに、操業の現場を半日かかりで拝見することができた。その際ベトナムから導入したホフマン窯であることがわかった。

その後、発見翌年の 2019 年 12 月に再調査でき、さらに今年 2025 年 1 月にも約 4 年ぶりに再度訪れることができた。なお最初の調査の概要は、当研究会の『産業遺産研究』第 26 号（2019 年 7 月発行、38 ～ 41 頁）に海外情報として記したが、今回はこれをベ-

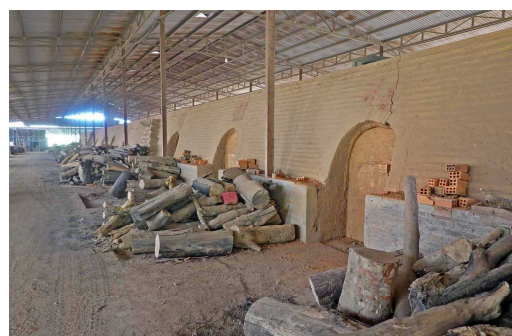


写真1 再訪時のホフマン窯(2025.1.16筆者撮影)

3. 現役ホフマン窯の操業の実態

—以前と変わった点、気付いた点を中心に—

ホフマン窯が所在する所は、パクセの街から国道 13 号線を南に向かった 19km 地点の、メコン川左岸から 1km 余り離れた内陸にある。周りは林野が広がっているが、煉瓦に適した土が採れることから、近年複数の煉瓦工場ができ、開発も進められている。

今回取り上げるホフマン窯は、日本にあるホフマン窯とは少し形態を異にしている。日本にある円形（旧下野煉瓦のホフマン窯、中央に煙突）や楕円形（旧神崎煉瓦のホムマン窯、大小 12 本の煙突）ではなく、外観的には細長い長方形の角形をしている。その大きさは長手方向が 44m、幅 10m と、ほぼ旧神崎のホフマン窯と規模的にはよく似ている。煙突は窯の端に 1 本の大煙突のみである。ただし窯内の構造はホフマン窯特有の連続した空洞になっていて、24 ヲ所の焚口を持つ歴としたホムマン窯である。

特に 3 回目の調査となった 2025 年 1 月時点で、それまでと違った点、新たに気付いた点は、作業の効率化、焼成法の変化、そして労働状況であった。

1 点目の作業効率化では、重たい煉瓦の運搬は、人力による台車運搬からフォークリフトやバイクリヤカーによる方法に変わっていきことである。以前は



写真2 台車時代の煉瓦運搬
(2018.12.26筆者撮影)



写真3 フォークリフトでの煉瓦運搬と自然乾燥中の煉瓦群 (2025.1.16筆者撮影)

2 点目の焼成法の変化では、木材を燃料としている点は変わらないが、通常日本のホフマン窯では窯の焼成帯の移動に伴って、窯屋上部に沢山ある小穴



写真4 現在は閉鎖された窯屋上の大鋸屑投入口 (2018.12.26筆者撮影)

男性のみの仕事であったが、導入後は女性の運転も見られた。煉瓦の原料土は、工場近くの山からも採取していたが、今は全て 1km ほど離れた所からトラック運搬している。土練機や煉瓦成形用の押出機など機械設備は以前と変わって

いなかった。このホフマン窯でも以前はこの小穴から、石炭粉でなく大鋸屑を投入していたが、今は止めていた。理由は

しなくても大丈夫とのこと。詳しくは聞けなかったが、常に大鋸屑を入れなければならない手間と費用を抑えたのであろう。煉瓦の出来具合に問題ないともいわれた。窯の屋上には大鋸屑が入った大きな布袋がそのままいくつも置かれていた。

3 点目は、成形、乾燥された煉瓦の窯入れ、焼成後の窯出しの作業体制である。変わったのか以前は



写真5 バイクリヤカーによる煉瓦の窯入れ
(2025.1.16筆者撮影)

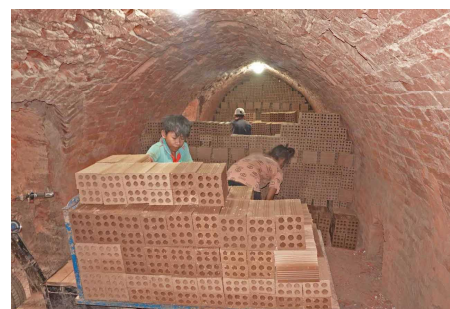


写真6 煉瓦積みする窯内の様子と独特の穴あき煉瓦 (2025.1.16筆者撮影)

が 1 窯 6,000 個～ 9,000 個になる煉瓦の窯入れ、窯出しを、これら家族が請け負い作業している様子が見られた。全体で 30 人ほどの従業員のうち、2 家族が工場内に住んでいるとのことであった。

なお、成形された煉瓦は、20 日間ほど自然乾燥するため、雨を避けるための大屋根がホフマン窯周りに、以前に比べてさらに拡大されていた。

4. ラオス南部の煉瓦需用

24 窯あるこのホフマン窯では、大体月に 40 万個の煉瓦が焼けるという。以前より増えたと思われる自然乾燥中の煉瓦が居並ぶ壮大な景観や、忙しく窯入れ、焼成、窯出しする作業状況を見ると、さらに生産量が増えているのでは思われた。

ラオス南部での煉瓦需用は、ここ最近急速に伸びていると感じる。正確な生産量は不明だが、ラオスに行く度に、市街地だけでなく農村部でも従来の高床式の木造住宅から煉瓦造の住宅が増えているからである。日本では歴史的窯であるホフマン窯も、ラオスでは街を支える重要な現役窯となっている。

第186回定例研究会の概要

田口 憲一／TAGUCHI, Noriichi

日時：2025年1月26日（日）13:00～17:00

会場：とよた市民活動センター 研修室

参加：16名

司会：夏目勝之 記録：田口憲一

1. 研究報告、調査報告

〔186-11-01〕産業遺産物語り4「テレビの父高柳健次郎の研究者魂／渡辺治男

静岡大学工学部内にある高柳記念未来技術創造館には、テレビジョン技術のパイオニア、高柳健次郎の業績を示す展示があるが、特に高柳の人柄や人なりを紹介した展示が目を引く。

ここでは、高柳健次郎が無線遠視法(テレビジョンのこと)の研究を志した経緯、高柳の主な業績、高柳の研究哲学について紹介した。高柳の研究哲学は、①チームワークによる研究の重視、それが優秀な後継者を生むことにつながる、②研究費確保は重要、高柳財団を設立し研究助成を行う、③研究成果はいち早く商品化して世の中の役に立てる、などである。

質問：浜松に高専ができたのは何故？

回答：駿河と遠江の確執が関係しているのではないかな。

〔186-11-02〕『『産業遺産の多面的価値分析』手法の紹介と石見銀山の明治期坑内軌道跡での分析例』／大島一朗

(報告延期)

〔186-11-03〕ドイツ、ルール地方の保存された製鉄所ー北デュイスブルク景観公園のマイデリッヒ製鉄所とハッティンゲンのヘンリッヒス製鉄所ー

Erhaltene Eisenhütten im Ruhrgebiet, Deutschland; Meidericher Hütte im Landschaftspark Duisburg-Nord und Henrichshütte Hattingen／オリバー・マイヤー

北ドイツ、ルール地方は、かつてのルール工業地帯でルール炭田の石炭による、製鉄・製鋼業が盛んであった。

ライン川やルール川に沿った一帯には多くの製鉄所の高炉と諸施設が建設されていた。

ここでは、産業文化ルートにもなっている北デュイスブルク景観公園のマイデリッヒ製鉄所とハッティンゲンのヘンリッヒス製鉄所の歴史とその産業遺産とについて報告した。



〔写真1〕マイデリッヒ製鉄所の第5高炉（右）とその熱風炉（左） 2019/08/24 石田撮影



〔写真2〕ヘンリッヒス製鉄所の第3高炉 2019/08/25 石田撮影

質問：現在稼働中の製鉄所は？

回答：ザルツギッターAG、ディリンガー・ヒュッテ、アルセロールミタル・ブレーメン、ティッセンクルップ、など6ヶ所ある。

〔補足〕ヘンリッヒ製鉄所は転炉があり鋼を製造していたので、保存価値が高い。

2. その他諸報告、保存問題など

〔186-21-01〕パネル展について／渡辺治男

・パネル展の見守り当番がまだ足りないのご協力をお願いしたい。

〔186-21-02〕

なし

〔186-22-01〕トピックス（産業遺産に関する話題・近況など）

3. 研究誌、会報（研究会ニュースレター）

〔186-31-01〕研究誌『産業遺産研究』第32号の原稿募集と編集について／石田正治

資料を元に『産業遺産研究 第32号』の原稿募集、編集スケジュール、会報の原稿提出期限などを説明。

〔186-31-02〕会報ニュースレター電子メール版について／橋本英樹

4. シンポジウム・パネル展・その他事業

〔186-41-01〕シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第41回／八田健一郎

- ・資料集は後日作成の予定。(40～50部を紙で発行、残りはPDFで)
- ・次回の件はまだ議論していない。

〔186-41-02〕パネル展と講演会／渡辺治男
テーマ：「大正ロマン、昭和ロマンのモノがたりⅡ
―消え去った風景、忘れられた施設―」

開催期日：2025年1月28日～2月16日

会場：名古屋都市センター11階まちづくり広場

講演会：2025年2月9日(日)午後

会場：同上ホール

〔186-41-03〕「30周年記念事業委員会」
・編集委員長の編集費は当初案1万円を3万円に増額する。(他の委員は当初案通り3000円)
・編集委員で希望があれば1冊1500円で現物と支給する。

〔186-41-06〕WEBサイトの運営と管理／岩井章真
なし

5. 見学会、その他の催し物 案内

〔186-51-01〕大井発電所・旧北恵那鉄道廃線跡見学会(3月25日)／浅野伸一

- ・見学先の概要説明。
- ・関電から平日なら受入可との回答だったので、電気記念日に設定した。

6. 文献紹介、資料紹介 () 内は紹介者

【参考文献】

〔186-61-01〕なし

【参考資料】

〔186-61-02〕一宮市三岸節子記念館・尾西歴史民族資料館の行事紹介(野村千春)

〔186-61-03〕名古屋陶磁器会館紹介(浅野伸一)

【その他の資料】(事務局)

〔186-61-04〕なし

7. その他の出版広報事業

〔186-71-01〕なし

8. 役員会等

〔186-81-01〕幹事会・役員会等 事務局

・必要の都度メールで実施 5月10日に役員会開催の方向で調整中。

定例会・見学、シンポジウム、パネル展と講演会、などは、メールで打ち合わせ。

9. 事務局関係

〔186-91-01〕会員異動(前回の定例研究会以降)事務局

入会(敬称略)：田中憲二(2024/11/21)、古橋崇史(2024/12/10)

退会(敬称略)：なし

〔186-91-02〕会費納入のお願い／事務局・会計
約20名が会費未納。

【郵便局のゆうちょ銀行ATMから振込の場合】

口座記号・口座番号 00810-9-138886

年会費 4,000円

(郵便局のATMの近くに置いてある青色の振替用紙をご利用下さい)

【ゆうちょ銀行以外から振り込む場合】

ゆうちょ銀行 ○八九店 当座 138886

口座名義 中部産業遺産研究会

チュウブサンギョウイサンケンキュウカイ

問合窓口 会計担当 加藤真司

e-mail: ssmkatou@hm9.aitai.ne.jp

〔186-91-03〕書籍・資料等交換会／事務局

会員の不用になった関連書籍や資料を希望者へ引き継ぎます。

TICCIH2005英文資料(蹴上発電所)、日工大工業技術博物館資料、マザック100年ほか譲渡。

〔186-91-04〕その他 なし

〔186-91-05〕研究会スケジュール、関連団体スケジュール、他／事務局

2025年

01/28～02/16 パネル展

名古屋都市センターまちづくり広場

02/09(日)13:00～ パネル展講演会

名古屋都市センターまちづくり広場ホール

03/23(日)13:00～ 第187回定例研究会

とよた市民活動センター

03/25 (火) 木曾川大井発電所・旧北恵那鉄道廃線跡見学会

05/25 (日) 13:00～ 第33回総会・第188回定例研究会 会場：名古屋市緑区生涯学習センター

10. 意見交換・自由発言

- ・森山和彦：稲武地域での活動紹介。
- ・寺澤安正：松永安左エ門の生誕15年、関係施設の紹介、保存問題など。
- ・大田博行：時水力発電所について、桑原排水機場の遺物（放置中）の保存について。
- ・浅野伸一：松永安左エ門の日記が研究対象となった。
- ・山田貢：飯田市の保存SLの譲渡先を探している。

第187回定例研究会の概要

夏目 勝之／NATSUME, Masayuki

日時：2025年1月26日（日）13:00～17:00

会場：とよた市民活動センター 研修室

参加：16名

司会：夏目勝之 記録：夏目勝之

1. 研究報告、調査報告

〔187-11-01〕「鉄道技術者 白井昭の取り組み～大井川鐵道井川線のアプト式鐵道への取り組みを中心に～」／橋本英樹

2025年2月26日、ご逝去された白井昭氏について、追悼の話をした。白井昭氏は、名鉄の技術者としてパノラマカーの設計、大井川鐵道における蒸気機関車による保存鐵道の取り組みなどがあるが、ここでは井川線アプト式鐵道の建設についての白井氏の業績を中心に紹介した。追悼講話の内容は、『産業遺産研究 第32号』に投稿する予定。

〔187-11-02〕「大井川流域、大井川鐵道の開発者中村円一郎」、「白井昭氏の功績」／寺沢安正

大井川鐵道は大井川上流の木材、旅客、電源開発の貨物輸送などを目的に1925（大正14）年に設立（取締役社長：中村円一郎）、現在、金谷一千頭間（大井川本線）、千頭一井川間（井川線：通称：南アルプスアプトライン）で事業を展開している。

白井昭の功績は、

（1）1976（昭和51）年、大井川本線のSL運転＝SL動態保存

（2）1990（平成2）年、井川線（通称南アルプスあぶとライン）のアプト式運転の採用。アプトいちしろ～長島ダム間の走行距離は1.5km。

（3）世界3大・山岳鐵道（台湾阿里山鐵道・スイスブリエンツ・ロートホルン鐵道）との連携協定。

（4）鐵道技術の開発と保存。

など多くある。

〔187-11-03〕「エレベーター談義」／浅野伸一

産業遺産の調査研究は、産業遺産自体を対象とする研究と、産業遺産を取り巻く地域、社会、文化との関係性を対象とする研究がある。報告では、エレベーターをケーススタディとして取り上げ、周辺環境との関わりに関する雑学的知識（エレベーター談義）を内容とするエレベーター文化の諸相を紹介した。

2. その他諸報告、保存問題など

〔187-21-01〕「中川運河沿いの産業遺産について 愛知大学における展示企画案」／愛知大学特別客員教授・永柳宏（非会員）

2027年を目途に展示、講演会等を企画する。地域を学び、地域との連携を図るため。中川区役所に協力を要請する予定で、堀川や名古屋港でなく中川運河を中心に。

→当面、天野武弘が窓口となって調整していく。

〔187-21-02〕「再訪・ラオス南部の現役ホフマン窯と鍛冶屋村の一断面」／天野武弘

ラオス南部で操業中の煉瓦焼成用ホフマン式輪環窯と鍛冶屋が集積する鍛冶屋村を再訪し、現状を紹介した。 ※本会報10ページ参照。

〔187-22-01〕トピックス（産業遺産に関する話題・近況など）

・「名古屋城のたたき調査実施（1/31実施報告）」／天野武弘

名古屋城調査研究センターの依頼で名古屋城辰之口のたたき遺構を調査した。大樋東口、二之丸庭園北池、南蛮練塀でたたきを確認。4月中旬に名古屋城たたき遺構見学会を計画中。詳細が決まったらあらためて告知する。

・「駒ヶ根シルクミュージアム、ガラ紡機のこと（2/17搬出報告）」／天野武弘

駒ヶ根シルクミュージアムで展示のガラ紡機は京都に受け入れ先が見つかり搬出した。

・岡本小次郎（服部長七の片腕的存在）文書の経過報告／天野武弘

岡本小次郎文書の接写が終了し、今後解説に着手。解説は容易でないが、新たな発見を期待。

3. 研究誌、会報（研究会ニュースレター）

[187-31-01] 研究誌『産業遺産研究第32号』の編集について／石田正治

資料をもとに『産業遺産研究第32号』原稿応募状況を説明した。

[187-31-02] 会報ニュースレター 電子メール版について／橋本英樹

最近、電子メールが届かない事例が複数件発生している。配信が無いと気付いたら橋本幹事まで連絡を。

4. シンポジウム・パネル展・その他事業

[187-41-01] シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第41回／八田健一郎

3/23、午前に実行委員会を開催した。講演報告資料集は予算内で完了できる見込みである。

今回のテーマは今後相談する。陶磁器関連とする一案あり。

[187-41-02] シンポジウム「日本の技術史をみる眼」第41回の講演報告資料集について／天野武弘

資料集が完成した。会員は手渡しなら1冊500円で頒布する。郵送の場合は1000円。

[187-41-03] パネル展と講演会／渡辺治男

テーマ「大正ロマン、昭和ロマンのモノがたりⅡー消え去った風景、忘れられた施設ー」

パネル展が終了し、アンケート結果をまとめた。パネル展入場者は約1200名、講演会参加者は105名と盛況だった。2025年1月29日の中日新聞朝刊（市内版）に記事が載った。

[187-41-04] 「30周年記念事業委員会・30周年記念誌編集委員会の閉鎖について／天野武弘

記念誌発行作業が完了したので、会計報告をして編集委員会を閉じる。

・デジタルアーカイブの作成 石田正治（5分）

刊行物等のPDF化は終了間近。データの扱い（保存と公開）等を今後相談する。

[187-41-05] WEBサイトの運営と管理／岩井章真
なし

5. 見学会、その他の催し物 案内

[187-51-01] ワークショップ「長波無線通信技術の歴史とその遺産ー鳳山無線電信所の保存と利活用ー」（仮題）／石田正治

8月27・28日に台湾・高雄市で鳳山無線電信所遺構見学とワークショップを計画している。参加申込期限は4月15日。

[187-51-02] 3月25日の木曽川大井発電所・旧北恵那鉄道廃線跡見学会について／大橋公雄、野村千春・朝の集合は時間厳守で。（バス乗車場所は長く停まっていられないため）

・参加費の支払いはできるだけお釣りが要らないように。

6. 文献紹介、資料紹介 （ ）内は紹介者

【参考文献】

[187-61-01] 文献紹介／天野武弘

・「偲ぶ会」実行委員会『中岡哲郎先生追悼文集』
・矢後 和彦、ベルナール・トマン『産業遺産の社会史 日本とフランスの歴史・文化・課題』

【参考資料】

[187-61-02] なし

【その他の資料】（事務局）

[187-61-03] 「KINIAS ニューズレター」近畿産業考古学会 →会場内回覧

[187-61-04] 「ニューズレター」東京産業遺産学会 →会場内回覧

7. その他の出版広報事業

[187-71-01] なし

8. 役員会等

[187-81-01] 幹事会・役員会等／事務局

・必要の都度メールで実施

定例研究会・見学、シンポジウム実行委員会、パネル展と講演会勉強会、など

・5/10（土）13:00～ 緑生涯学習センター第3集会室で役員会開催予定

9. 事務局関係

[187-91-01] 会員異動（前回の定例研究会以降）／事務局

入会（敬称略）： 野々山 舜（2025/2/10）

退会（敬称略）： なし

[187-91-02] 会費納入のお願い／事務局・会計

2025年度年会費の振込をお願いします。

振込先は、次ページに掲載。

問合窓口 会計担当 加藤真司

e-mail: ssmkatou@hm9.aitai.ne.jp

[187-91-03] 書籍・資料等交換会／事務局

会員の不用になった関連書籍や資料を希望者へ引き継ぎます。

近鉄社史『最近20年のあゆみ』、山盛富高→橋本英樹

[187-91-04] その他 なし

[187-91-05] 研究会スケジュール、関連団体スケジュール、他／事務局

2025年

03/25 (火) 木曽川大井発電所・旧北恵那鉄道廃線跡見学会

05/25 (日) 13:00～ 第33回総会・第188回定例研究会 緑生涯学習センター第2・3会議室

07/27 13:00～ 名古屋市市民活動推進センター 第189回定例研究会

第33回総会 第188回定例研究会 案 内

期 日：2025年5月25日（日）13:00～16:15

会 場：緑生涯学習センター

アクセス：名鉄線・鳴海駅下車、徒歩5分

※定例研究会での報告を希望される方は下記事務局担当宛ご連絡ください。

夏目勝之 <ec79helvetia@na.commufa.jp>

山田 貢 <yamada202102@gmail.com>

第189回定例研究会 案 内

期 日：2025年7月27日（日）13:00～17:00

会 場：名古屋市市民活動推進センター

アクセス：地下鉄名城線・矢場町駅下車、徒歩5分

2025年度年会費ご入金のお願

1. 年会費 4,000円

2. 振替、振込口座 ゆうちょ銀行

■ゆうちょ銀行より振替

□座番号 00810-9-138886

□座名 中部産業遺産研究会

チュウブサンギョウイサンケンキウウカイ

■他銀行からの振込

ゆうちょ銀行 ○八九店

当座預金 138886

□座名 中部産業遺産研究会

チュウブサンギョウイサンケンキウウカイ

※ 2024 年度会費、未納の方は、合わせてお振り込み下さい。

■編集後記、原稿募集

■編集後記

天野武弘会員の人造石の産業遺産めぐりシリーズは、第22回となりました。さらに海外の産業遺産紹介シリーズが始まりました。天野会員に倣って多くの皆さまの投稿をお待ちしています。 (石田)

■産業遺産に関する諸情報、短信、文献紹介、ご意見などお気軽にご投稿下さい。投稿は郵送または電子メールでお送り下さい。写真には必ず撮影者と撮影日時を記載したメモを貼り付けて下さい。

原稿送付先：石田正治 ishida96@tcp-ip.or.jp

第98号の原稿締切日：2025/06/15

■「中部産業遺産研究会会報」発行予定

第99号 (2025/07/15) 第100号 (2025/10/15)

第101号 (2026/01/15) 第102号 (2026/04/15)



中部産遺研会報 第98号（訂正版） ISSN 2189-5619

Newsletter of The Chubu Society For The Industrial Heritage Vol.98

発行日：2025年04月20日、2025年07月01日訂正

編集委員：石田正治・橋本英樹・山田貢・大橋公雄・浅野伸一・朝井佐智子・夏目勝之
中部産業遺産研究会事務局：

〒463-0088 名古屋市守山区鳥神町194 山田 貢 方

中部産業遺産研究会のホームページ <https://csih.sakura.ne.jp/>

掲載記事の無断転載を禁じます。

Copyright 2024, The Chubu Society For The Industrial Heritage, All rights reserved.